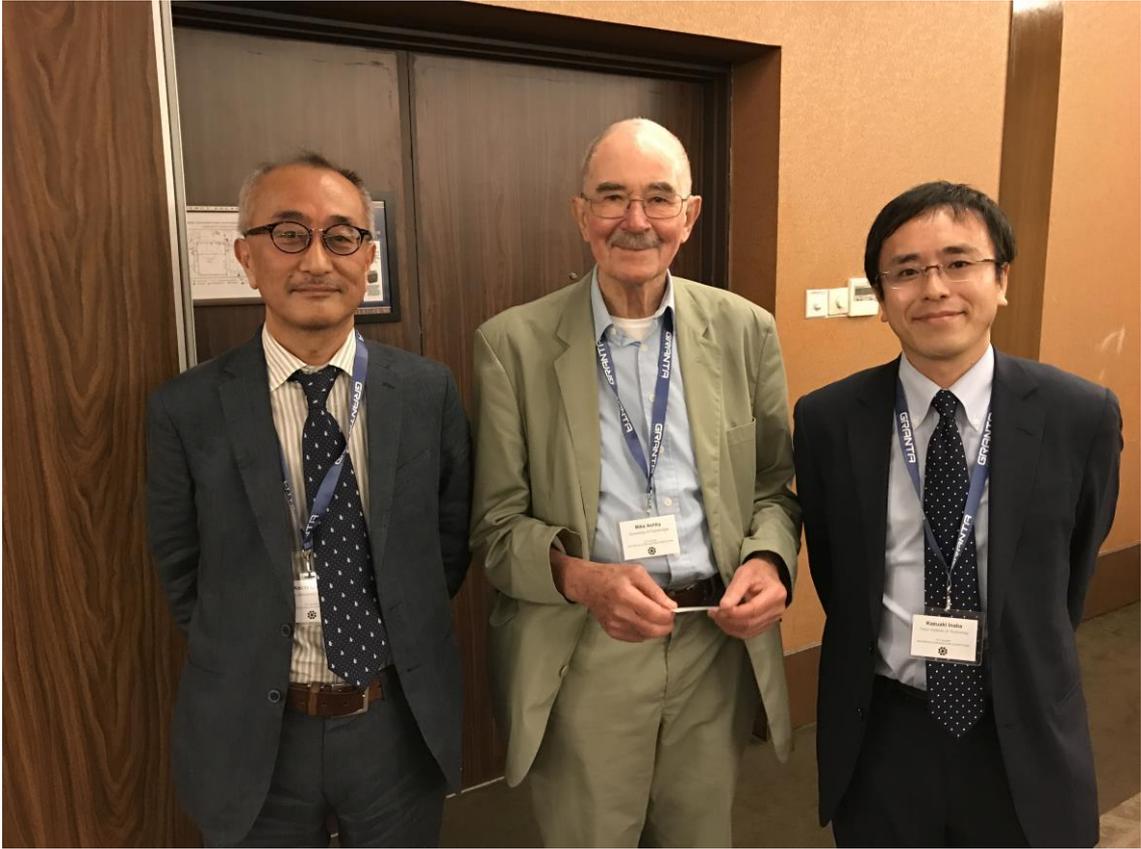


2016年12月8日～10日にシンガポールのNUS（シンガポール国立大学）でAshby先生が主宰する会議があり、先生とお会いして議論する機会を得たので報告する。

12月8日9日には2nd Asian Materials Education Symposiumが開催された。Ashby先生が提唱されている材料科学を起点とした設計法を教育の視点から議論する場で本拠地のケンブリッジではすでに8回、米国でも7回開催されている。アジア地区では二年前に同じくNUSで開催されており、今回二回目となる。シンガポール、インド、ニュージーランド、中国、台湾、マレーシア、タイ、英国、米国、日本から70名を超える参加者があった。日本からは筆者を含め3名の参加があった。まだまだ日本でのAshby法の知名度は低いと感じた。Ashby先生の考え方（Ashby法）を学生、技術者にどのように伝えて実践するかに関しての多面的な報告が口頭発表、パネル発表で行われ、活発な議論があった。広く設計を教える手段としてAshby法を適用している事例が多かった。次回は2017年4月6日、7日にケンブリッジで9th International Materials Education Symposiumが開催される。テーマは”Education and Industry”でまさに本連載で提案しているような内容が議論の中心になるものと期待している。

上記シンポジウムに引き続き、12月10日にGranta Design CES EduPack Workshopが開催された。本連載で紹介しているAshby法の具現化ツールであるCES EduPackに関する講義でAshby先生自ら丸一日熱く伝授いただいた。材料・プロセスデータを起点にAshby先生の別の顔でもあるEco Designに関しては製品レベル、流通レベルでの評価も可能になっている。多くのユーザが本ツールを使用することにより豊富な情報がデータベースとして蓄積されていて、近々発表となるCES EduPack 2017には製品に対する国毎の嗜好性の違いに関する情報も盛り込まれるとのことである。

今回のAshby先生との交流を通して、Ashby法の奥深さに触れるとともに、この考え方を日本の機械設計技術者に伝えることの重要性を改めて感じた。



Ashby 先生（中央）、因幡先生〔東工大〕（右）、筆者（大富）（左）